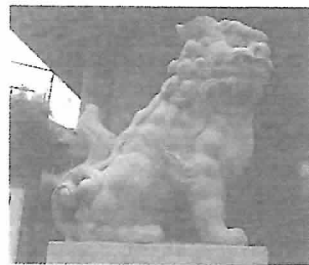


丹波に出雲といふ所あり

丹波に出雲といふ所あり。大社を移して、めでたく造れり。しだのなにがしとかや知る所なれば、秋のころ、聖海上人、そのほかも人あまた誘ひて、「いざ、たまへ、出雲拜みに。かいもちひ召させん。」とて、具しもて行きたるに、おのおの拜みて、ゆゆしく信おこしたり。

御前なる獅子・狛犬、背きて、後ろさまに立ちたりければ、上人いみじく感じて、「あなめでたや。この獅子の立ちやう、いとめづらし。深きゆゑあらん。」と涙ぐみて、「いかに殿ばら、殊勝のことは御覧じとがめずや。むげなり。」と言へば、おのおのあやしみて、「まことに他に異なりけり。都のつとに語らん。」など言ふに、上人なほゆかしがりて、おとな



狛犬

■本文中の「に」について、文法的に説明してみよう。

- 1 出雲 現在の京都府亀岡市千歳町出雲。
- 2 大社 鳥取県の出雲大社。「移して」は、その分霊を移し迎えて。
- 3 しだのなにがしとかや知る所 しだの某とかの領有している土地。「しだ」は志太か。「知る」は領有する意。
- 4 聖海上人 伝未詳。
- 5 いざ、たまへ さあ、いらっしやい。
- 6 かいもちひ ほたもち。そばがきとも。
- 7 獅子・狛犬 拜殿の前の一對の獅子・狛犬の像。向き合つて置かれる。
- 8 いかに殿ばら、殊勝のことは御覧じとがめずや なんとみなさん、このすばらしいことは、お目にとまりませんか。
- 9 むげなり (気づかないのでは) あんまりだ。

■「ちと承らばや」を、「ばや」に注意して現代語に訳してみよう。

しくもの知りぬべき顔したる神官を呼びて、「この御社の獅子の立てられやう、さだめて習ひあることにはべらん。ちと承らばや。」と言はれければ、「そのことに候ふ。さがなき童べどもつかまつりける、奇怪に候ふことなり。」とて、さし寄りて、する直して往にければ、上人の感涙いたづらになりけり。

(第二三六段)

5

10 そのことに候ふ それなんですよ。問いに応じて、言い出すことば。
11 奇怪に けしからぬことで。

*めでたし *具す *ゆゆし
*ゆゑ *ゆかしがる *おとなし
*さがなし *いたづらなり

学習

- 1 「いかに殿ばら、……むげなり。」(四六・八)と言った時の「聖海上人」の気持ちはどのようなものだったか、想像してみよう。
- 2 作者は、この話で何に批判を加えようとしているか、考えてみよう。

徒然草 平安時代の「枕草子」と並んで、随筆文学の代表的な作品。作者が四十八、九歳ころまでに書かれたといわれる。人生・社会の問題、自然の情趣、芸能観、説話・逸話を踏まえたもの、また古来の習慣風俗など、多方面の事柄をとりあげ、多様な角度からその本質を凝視している。本文は「日本古典文学全集」によった。
兼好 一二八三ごろ—一三五〇年ごろ。鎌倉時代末期の歌人・随筆家。俗名は卜部兼好。家は代々、京都の吉田神社の神官であった。はじめ、武士として宮廷に仕えたが、のちに出家して兼好と称した。

出典 『精選国語総合 古典編 徒然草』株式会社筑摩書房 平成17年1月 46〜47頁

注意
*当日使用した
レジュメとは
異なります。